



アメリカ医療の トリセツ

取扱説明書



プライマリーケアプロバイダー (PCP) とは？



渡米してすぐの方も、長年こちらに住んでいる方も、米国医療に関するになると「よくわからない」「もっと知りたい」と感じている方も多いのではないのでしょうか。そこで、ミシガン大学の家庭医学科の先生方に医療に関する様々なトピックについてまとめていただき、連載でご紹介します。

アメリカではよく、プライマリーケア・プロバイダー (Primary Care Provider: PCP) という言葉がよく使われますが、どういう意味があるのでしょうか。

最近、日本でも、「かかりつけ医」というコンセプトを推奨しているので、ご存じかもしれませんが、プライマリーケア、というのは、患者さんが直接かれる、患者さんに一番近い医療提供者のことを指します。アメリカでは、医師の他に、医師と同様の医療行為ができる医療提供者 (医療プロバイダー) である、ナースプラクティショナー (N.P: 上級看護師) やフィジシャンアシスタント (PA: 医師アシスタント) 等の医療提供者を総称して、プロバイダーと呼び、プライマリーケアプロバイダー (PCP) は、いわゆる、「かかりつけの医療提供者」のことを指します。

PCPの役割は、患者さんの病歴、家族歴、アレルギー、現在の薬、問題点、家族構成などを把握して、患者さん一人一人の健康増進をすることです。そのために、定期検診を毎年行い、それぞれの患者さんに必要な検査やワクチンを勧めたり、生活指導をするなどの予防医学やがん検診を行います。PCPは持病の管理、検査、薬の処方もします。患者さんが症状や心配があれば、電話相談や診察をするのも、PCPの役割です。PCPは、患者さんにとっての医療システムの入り口で、医療システムとの架け橋になる役割もします。患者さんに何が必要なのかのアドバイスをし、患者さんとよく話し合うことで、患者さんの希望や気持ちに沿う方法を一緒に見つける、というのが理想の形なので、普段から信頼関係を作っておくことが大切です。本来は、PCPとは、一人の決まった医師 (その他のプロバイダーを含む) で、定期健診も、病気になったときの診察も、同じPCPに相談できるのが理想です。ただ、急に具合が悪くなった場合などは、PCPにすぐに診てもらえない場合は、同じ診療所の同僚医師に診察を受けるのは問題ありません。ただ、定期健診のような、前もって予定がわかっている予約はPCPとすることが推奨されます。

日本だと、湿疹ができれば皮膚科に行き、膀胱炎になったら泌尿器科に行き、不正出血があったら産婦人科に行くのが一般的ですが、アメリカでは専門医の受診は予約が必要で、そうすぐには予約がとれないことが多く、もし予約が取れたとしても、そこに行くべき専門医なのかどうかは、かかってみないとわかりません。例えば腹痛の場合、胃腸科と婦人科とどちらにかかるといいのか、また、顎が痛いとしても、口腔外科と耳鼻科のどちらにかかると適切かは、判断が難しいことがあります。アメリカの外来診療は基本的に予約診療なので、間違った科にいつてしまうと、行くべき科に受診するのは、さらに先になってしまいます。PCPは、婦人科的症状、腰痛などのよくある整形外科的症状、腹痛や咳などの

内科的症状、耳が痛いなどの耳鼻科症状など、様々な疾患の外来診療のトレーニングを受けており、患者さんはまずPCPに連絡して相談します。多くの場合は、PCPが診断・治療をしますし、必要であればPCPが必要な検査をオーダーしたり、行くべき専門医を紹介します。検査の結果はPCPに報告が行き、患者さんにはPCPが結果を説明します。専門医に紹介された場合、どういう検査結果や所見から、どういう診断になり、治療が勧められたか、という内容はPCPにも連絡がいく仕組みになっています。そのため、患者さんがいろいろな専門医にかかっている、その情報はすべてPCPに集まることになっており、患者さんの検査結果や飲んでる薬は、すべてPCPが把握できる仕組みになっています。救急外来を受診したり、入院したりした後の継続的な経過観察も、PCPがする事になっています。

では、どうやってPCPを見つけたらいいのでしょうか。

PCPといわれる専門科は、家庭医学科、一般内科、小児科、産婦人科です。18歳以上の人は、一般内科または家庭医学科、18歳未満の子供は小児科または家庭医学科の医師をPCPとできます。成人女性の場合は、婦人科検診や妊娠のケアなどは、紹介がなくても、産婦人科に直接かかることもできますが、産婦人科領域以外の病気をみてもらうためには、内科または家庭医学科の医師とかかりつけの関係をしておくことがおすすめです。PCPの診療所に電話して心配事を相談することもできますし、看護師や医師から簡単な電話でのアドバイスを受けることもできます。PCPを持っていないと、診察が必要かどうかわからないときに、病院の救急外来 (Emergency Room) やアージェントケア (urgent care・急病診療所) にかざるをえません。そこでも、「PCPにあとは診てもらってください」と言われるので、具合が悪くなくても、PCP登録をしておくことは重要です。場所によって違いますが、一般的に新患として初めての医師との予約をとるのには、2週間から数か月の待ち時間があります。

かかりたいPCPを決める際、健康保険のプランも関係してきます。健康保険のプランによって、すべての専門医受診はPCPからの紹介がないとできないHealth Maintenance Organization (HMO)のようなプランと、PCPを決めなくてもいいプランのPreferred Provider Organization (PPO) があります。PPOでは、PCPを紹介する必要はないものの、安くかかれる医療グループ (preferred providerまたは、ネットワーク内) と、患者負担が高くなる医療グループ (ネットワーク外) に分かれていることが多いので、PCPを決める場合には保険会社に確認して、そのPCPにかかることで法外に高い費用を払うことにならないように確認する必要があります。新たに

健康保険を契約すると、知らないうちにPCPが決められている場合がよくありますが、保険会社に電話して自分が使いたいPCPに変更してもらい、それが問題ないことを確認しておくことをおすすめします。そうしておく事で、後から予想外の請求書が来ることを防げます。

最後に、医師側からみて、よくあるPCPの使い方の問題点とその解決方法をあげてみます。

問題1：子供が熱をだして、PCPの小児科医はすぐ予約がとれなかったのに、すぐ診てくれるといわれた家庭医にかかった。

解決：PCPは一か所に決めておくべきです。この家庭医の紹介で専門医を受診すると、専門医は紹介元の家庭医に報告をし、本来のPCPである小児科医には必要な情報が届かないこととなります。どうしてもすぐに診察してほしい場合は、PCPにその理由を言って相談するか、アージェントケアにかかりましょう。

問題2：同じ診療所内で、A医師がPCPと登録されているけれど、毎回B医師に診てもらっている、A医師とは最近全く会っていない。

解決：いつもB医師に診てもらって、理解してもらっているし、B医師のほうが話しやすいのであれば、PCPをB医師に変更するのがいいでしょう。A医師がよければ、次回はA医師との予約をとり、これからは継続してA医師にフォローしてもらおう事をおすすめです。

このように、PCPとは、特に病気がなくても、新生児から高齢者まで、すべての人が持つべき医療への窓口です。医療に対する満足度はPCPとの良好な関係があるほど高いという研究発表もあります。

筆者プロフィール：

医師 リトル (平野) 早秀子

ミシガン大学家庭医学科
助教授

1988年慶応義塾医学部卒業、1996年形成外科研修終了。2008年Oakwood Annapolis Family Medicine Residency 終了後、2008年より、ミシガン大学家庭医学科で日本人の



患者さんを診察しています。産科を含む女性の医療、小児医療、皮膚手術、創傷のケアに、特にちからを入れていきます。

ミシガン大学についての情報は、ウェブサイトを確認できます。
<https://medicine.umich.edu/dept/japanese-family-health-program>